

金澤醫學會雜誌第三卷第二十六號

明治廿四年十二月三十日發兌

論說及實驗

◎雞ノ皮膚ヲ人体ニ植接セシ實驗

會員 谷中正勝

植皮ノ術タル彼ノ瑞西國ノレベルダーン氏ノ發明ニ係
リ爾來數氏ノ改良ニ由リ完全ノ成形術トハ成レリ然レ
モ何レモ人体ノ皮膚ヲ應用シテ其材料ニ供シタリ故ニ
之レカ材料ヲ得ルニハ或ハ情トシテ忍ビサル處アリテ
之レカ施術ヲ躊躇セシ場合ナキニアラス
余ハ此頃如斯場合ニ際會シ鶏ノ皮膚ヲ代用シテ之レカ
手術ヲ企テタリ然ルニ幸ニ良成績ヲ得タルヲ以テ其術
式ヲ世ニ公ニシ同臭諸氏ノ續々實施アランヲ喚起ス
蓋シ其法タル彼ノレベルタン、チールシュ、及ブルンス

等ノ法ニ據リシニ非ラス一種ノ變式ニ出テタリ然レモ
植皮ニ關スル原則ハ終始之レヲ固守セリ

今ヤ其結果ニ就テ考フルニ余カ術式ノ完全ナラサリシ
ヲ了知セリ故ニ余ハ目今以後專ラ先輩諸賢ノ法則ニ則
トリ勉メテ之レカ改良ヲ企テ益々良成績ヲ得ントス蓋
シ植皮術ニ關スル沿革ヲ解得スルヲハ余カ術式ヲ述フ
ルニ當テ必要ナルヲ以テ概畧ヲ記シ讀者ノ參考ニ供セ
ントス

抑モ植皮術ハレベルダーンノ發明ニシテ氏ハ一千八百
六十九年十二月八日巴里ノ外科醫會ニ於テ世ニ公ニセ
シヲ以テ嚆矢トス爾來一般ノ注意ヲ促シテ諸家靡然ト
シテ之レヲ模倣スルニ至レリ然ルニ氏カ法タル種々ノ
欠點アルヲ發見セリ即チ(一)綳帶交換ニ際シテ種接皮

片ノ肉芽面ニ癒着セスシテ却テ之レヲ覆ヒタル「アロ
 テクチーフ」ニ固着シテ目的ヲ達セサルコアリ(二)癒着
 セシ種植皮片再ヒ消滅スルコアリ(三)諸種ノ障害ナク
 全ク癒着セシ處ノ皮片ニ再ヒ生機ヲ失スリコアリ(四)
 此法ニ依テ皮膚ノ大ナル欠損ヲ補フハ頗ル煩雜ノコニ
 シテ且ツ時日ヲ要スルコモ亦タ多シ

以上ノ諸欠點ヲ排除シ確實ナル植皮法ヲ行ヒシハ「ラ
 イプチツヒ」大學ノ教授チールシユニシテ氏ハ一千八百
 七十年改良植皮法ヲ公ニセシ以來歐洲各國ニ於ケル外
 科醫ノ多數ハ之レヲ稱用スルニ至レリ今氏カ改良法ヲ
 述ヘンニ氏ハ一千八百七十四年植皮法ニ於ケル「アル
 バイト」(1)ニ就テ『移植皮片ノ肉芽面上ニ於ケル細密
 ナル解剖的變化ト題スル論説ヲ草シ中ニ次ノ語ヲ爲セ
 リ曰ク『移植セル皮片下ニ存在セル處ノ肉芽組織ハ他
 日瘢痕破潰ノ主ナル原因ナリト』而シテ氏ノ説ニ總テ肉

芽組織ハ明ニ區別シ得ヘキ二層ヨリナル者ニシテ其下
 層ハ強韌ナル結締組織ヨリ成リ脈管ハ水平ニ經絡シテ
 網狀ヲナス又上層ハ軟弱ナル結締組織ヨリナリ脈管ハ
 鉛直ノ經絡ヲ取ル是レ即チ固有ノ肉芽ニシテ後來強韌
 ナル瘢痕ハ此層ヨリナルモノナリ故ニ今若シ此面ニ上
 皮ヲ移植スルコト早キニ過クレハ此皮片ト彼ノ強韌ナル
 下層ノ結締組織間ニ尙軟弱ナル上層ノ存スルコアリテ瘢
 痕ニ軟弱ナル基礎ヲ與フルニ至ルヘシ

チールシユカ植皮法改良ニ於ケル研究ノ方針ハ乃チ上
 記ノ點ニアルモノニシテ終ニ其目的ヲ達シ一千八百八
 十六年柏林外科學會ニ於テ自家ノ法ヲ公ニセリ今其術
 式ノ提要ヲ述フレハ左ノ如シ

「一」防腐法ハ一般ノ外科術ニ於ケルト異ナル所ナシ即
 チ植皮スヘキ部分及皮片採取ノ局所ハ共ニ消毒ヲ行フ
 「二」消毒液ノ撰擇ニ石炭酸水、昇汞水等何レニテモ佳

ナリ

「三」施術ハ多クハ麻醉ニ乗シテ行ヘリ

「四」初メハエスマルクノ驅血帶ヲ使用セシモ終ニハ之ヲ癢セリ是レ却テ後出血ノ虞アルヲ以テナリ

「五」既ニ消毒ヲ終レハ手術間ハ常ニ新製ノ〇、六％ノ食鹽水ヲ使用セリ

「六」レウエルダーンハ表皮片ヲ創面ニ島嶼狀ニ配布シチールシユハ薄キ皮葉片ヲ以テ全創面ヲ被覆セリ是レ兩法ノ異ナル主眼ナリ

「七」レウエルダーンハ皮片ヲ直チニ肉芽面ニ移植セリチールシユハ先ツ軟弱ナル肉芽組織ヲ搔爬除去シテ新創面トナシ此創面ニ植皮ス是レ兩法ノ異ナル最要點ナリトス

又ブルンスノ植皮法ハチールシユノ法ニ多少改良ヲ加ヘタルモノニシテ今ブルンスノ改良法トチールシユカ

元來ノ法トチ比較スルハ左ノ異點アリトス

「一」全手術間ハ勿論後療法ノ時ト雖ハ嚴格ナル防腐法ヲ施行スルヲ

「二」皮葉片ハチールシユノ法ニ於ケルヨリモ著シク菲薄ナルヲ

「三」皮葉片ハチールシユノ法ニ於ケルヨリモ二三倍（必要ニ應シテ）大ナルヲ

以下余カ實驗ヲ記シ局ヲ結ハントス

患者ハ長野縣北佐久郡布施村小松可貫、齡二十二年

今ヲ去ル一ケ月前即チ明治二十四年十月十九日火藥ヲ弄セシニ誤テ全身諸部ニ火傷ヲ蒙レリ此際直ニ醫治ヲ加ヘシニ更ニ化膿セスシテ治癒ニ赴キ殆ント全治セリ然ルニ獨リ下腿（左右共ニ潰瘍ヲ殘セシモ今回ハ左側ニ於テノミ）施術シ右側ハ後日ヲ期シ施術スル筈ナリ）前側ノ創面ハ一大潰瘍面トナリテ遺殘シ荏苒治癒捗ラ

ス

十一月七日之ヲ檢スルニ左側下腿中部ノ前回ニ於テ上外方ヨリ下内方ニ向フテ横ハリ長徑三仙迷横徑二仙迷ノ潰瘍面アリテ肉芽ハ赤色ヲ呈シ表面平滑稍々顆粒狀ニシテ疼痛ナシ今ヤ之ヲ自然ノ癰痕形成ニ委スルキハ今後尙數十數月ノ日子ヲ要セサルヲ得サルヲ以テ植皮術ノ今日ニ必要ナルヲ感シ斷然施術スルヲ決シ全日午後レカ手術ニ着手セリ

〔術式〕第一段 潰瘍面ハ普通外科的手術ニ於ケルカ如ク嚴重ナル消毒ヲ施スカ爲メニ三%ノ石炭酸水ヲ以テ消毒シ且ツ消毒海綿ヲ以テ肉芽面ヲ充分ニ摩擦シ少シク出血スルニ至ル此ニ於テ豫メ全液ニ浸セル濕布ヲ以テ肉芽面ヲ壓迫被包シ止血セシム

第二段 鶏ヲ縛シ脇部不毛地ノ皮膚ヲ石鹼ヲ以テ洗ヒ且ツ〇、二%ノ昇汞水ヲ以テ能ク洗滌消毒シ移植ノ材

料ニ供ス

第三段 今ヤ雙方ノ準備成ルニ及ンテ豫テ消毒セル鶏子ヲ以テ鶏ノ脇部ノ皮膚ヲ摘擧シ剃刀ニテ徐々ニ鋸切シテ剃刀上ニ採取ス此際深ク皮下ニ達シ皮葉片ノ裡面ニ脂肪ヲ附麗シテ完全ノ皮葉片ヲ得ル能ハサリシヲ以テ大ニ困難ヲ極メ再三反複シテ稍々完全ノ皮葉片ヲ得タリ故ニ皮葉片ノ大ナラサリシハ實ニ已ムヲ得サリシ

第四段 皮葉片ヲ得ルヤ直ニ之ヲ肉芽面上ニ移シ消息子ヲ以テ出來得ハ丈ケ(翻轉收縮シ易シ)之ヲ延展シテ肉芽面上ニ密着セシメ漸次皮片ヲ島嶼狀ニ三個植接シ豫メ昇汞水中ニ浸セル處ノ護謄紙ヲ以テ被包シ(有孔ニスルヲ忘却セリ)且ツ防腐綑帶ヲ施シテ術ヲ了シタリ

〔經過〕一日間ヲ經テ綑帶ヲ解キ檢セシニ少シク化膿ヲ來タシ護謄紙ハ容易ニ剝離シ得タリ此際二個ノ皮片ハ

共ニ剝脱シ一個ハ白色ヲ呈シテ肉芽面上ニ密着殘存セ
 リ此ニ於テ石炭酸水ヲ以テ洗滌シ沃度仿謨末ヲ散
 護謨紙ヲ被ヒ防腐綑帶ヲ施ス

爾來該移植皮葉片ハ全ク植接シ漸次周圍ニ向フテ

面ヲ被ヒ僅ニ小指頭大ノ潰瘍面ヲ殘スノミニ至レリ

(但シ術後十五日ニ於テ)

一

三